

五月二三日

今、成田空港ラウンジ。十八時過である。七時過のタイ航空でバンコクへ。明日朝カンボジアへ入る。今朝は朝六時に起きて屋上菜園の手入れをして、荷造り、朝食をとって八時四五分に地下へ。スタッフ松本に一ヶ月休みをとらせてヨーロッパへ行かせることにしたのでチョットと彼と話した。午前中大学院面接。眼に余る程の人材不足である。俺のところから本当に建築家らしい建築家が出るのだろうか、お先は真暗だ。建築家は教育によって生み出せるのかな。もう十年以上教師をやっているが、こいつは恐いな、全く新しい質の才能を持っているなど直観する奴に会った事がない。まあそんなに簡単に現れる筈もないのだが。もうそろそろ大学はやめたいと考え始めているが、やり残していることもあるからそうそう勝手はできない。

筑摩書房から手紙が転送されてきた。笑う住宅を 読んださいたま市の女性からで、娘さんと二人暮りで頑張ってきた。五四才になつて家を建てたいと考え始めた。土地はあるので相談に乗れというモノである。北海道の女性に引続いて、女性だけの家族からの相談である。この人達は私のマイノリティへの考えを知らない。一組はTVで私を知り、一人は本で知ってくれた。彼女たちは私の正体らしきのうちに何を嗅ぎとってくれているのだろうか。私の正体本質はかくの如き他者の中にある。

日本時間二四日一時過、タイ時間二三日二時過飛行機は高度

を下げ始めた。あと一〇〇KM程でバンコクだ。良く眠つたような、眠らなかつたような六時間のフライトだった。バンコクは三〇〇Cらしい。十二時三〇分バンコク、アマリ・エアポートホテル、チェックイン。暑い。若いころ南廻りの飛行機でユーラシア大陸の様々な場所を訪ねた。台北、香港マニラ、バンコク、カルカッタカラチ、テヘランイスタンブールアテネなんていう飛び方だつてした。貧乏であつたが時間は無限にあると思つていた時代だ。どこの空港に降りても面白かつた。驚きがあつた。今は時間には有限なのを知つていて、無駄を省き、エアポートホテルに憚然としてゐる。若い頃だつたら朝まで空港内をブラついていて飽きなかつただろう。しかし、何があんなに面白かつたのだろうかといふかしむ。ゲーテのイタリア紀行上中下三冊持つてきたが多分読まないだろう。とメモしたら読む気になつて朝の一時に読んでゐる。このメモを書き始めた功德だ。日本時間朝の三時だぜ。読書も日記もノルマになつてきたな。ヴィツェンツァまでゲーテは辿り着いた。ヴェローナは過ぎた。パラディオのテアトロオリンピコをゲーテの眼で眺めることができた。しかし、ここはバンコクである。ゲーテにアジアを旅行させたかつた。チャオプラヤの船旅をさせて暁の寺、エメラルド寺院など訪ねさせたかつた。何を書いたかな。

五月二四日

六時起床。当然充分な眠りではなかつたが、昨日よりは体に力がみなぎつてくるような気がする。プノンペンに着いたら気を引締めないと、四十四名の人数を無事に生活させねばならないのだから。七時三〇分過空港³³ゲートで小休している。空港税が五〇〇バーツに値上がりしていた。タイ航空696便八時三五分発で

プノンペンへ飛ぶ。考えてみれば今年になって、一月二月三月四月五月と海外に出ている。三月は九州のワークショッブだったから、少し動き過ぎかも知れない。しかし、日本に居たって、立ちくされしてゆくばかりの感もあるし。日本という国、場所自体が立ちくされし始めているのだ。

メコンデルタの上空を飛ぶ。一ヶ月チョット前に中国山西省の空を飛んだのを思い出す。佐藤健は今日も闘っているにちがいない。

ゲートはヴェネチアに到着した。しかし巨人ゲートもこの高度からイタリアを見る事は無かった。十時前プノンペン空港着。空港内に日本大使館職員が迎えに来てくれて、車でウナロム寺院に。四ヶ月振りのひろしまハウス現場である。小笠原さんと再会。今十三時、いつものテラスで休み。ひろしま市の十数名も何やら二階で打ち合わせ。上棟式の事らしい。十八時日本大使館レセプション。大使公邸へ。夜食はウナロム寺院に戻り、おかゆを食べに行く。疲れてグッスリ眠った。汗びっしょりで眠った。

五月二五日

朝四時起きてしまう。四三名とりあえず寢床をそれぞれ確保して眠っている。何とかなるモノだなあ。五時半そつじ。六時にチョットした注意をして各自食事へ。七時半現場集合。八時半までレンガ積み汗を流す。一仕事して水浴小休の後十時ひろしまハウス上棟式。テップヴォン、ウナロム寺院大僧正、プノンペン市長、カンボジアオリソニック委員長、日本大使列席。国近、平岡、石山あいさつ。チアソパラ市長、小川大使、ミー・サムデー、NOC会長の祝辞をいただく。大僧正からは頭から花をふりかけてもらった。

私は四三名のボランティアにお礼を述べると共に、この建築のデザインについて述べた。仏陀の足の下に我々は今いること、それは平穏平和を意味する事、そしてプノンペンの平和を祈っている事を述べた。プノンペンが平和でなくなったらこの仏陀の足は西へ去るだろうと見栄を切ったら、大僧正が嬉しそうに笑ったのが印象的だった。プノンペン市長も気に入ってくれたようで、握手を求めてきた。ナイスデザインと市長から言われるとは思ってもみなかったので意外であった。

今、十三時前、メモをつけてこれから昼寝とする。午後三時から五時まで四十三名全員レンガ積み。広島グループも途中から参加した。四名程の青年海外協力隊のメンバーも飛び入りで参加。又、支援金をいただいた。ありがたい事だ。

水浴びをして休息。女性を中心にフンセン公園での盆踊りに参加した模様。と思っていたら、ウナロム寺院に残っていたのは俺一人だった。もう一人ウナロムに残った野崎善隆さんとふたりでNHKTV船村徹演歌巡礼視ている。美空ひばり北島三郎はやはりカンボジアで聴いてもイイゼこれは。演歌のイイものの中核は個人の心情の中に在るあきらめなんだろうな。合唱出来ぬ良さと悪さが同居しているのだ。ビートルズの名曲とひばりの名曲の違いは明らかにあって、歌唱力ではなく、詞曲の質の違いじゃないのかな。十九時頃眠くなってきた。

五月二六日

五時起床。良く眠った。水浴び。ここでの生活に水浴は必須だ。五、六人で水浴していると、これは浮世風呂ではないかと思うくらいに。

六時集合。今日の日程を伝える。自炊をすすめてみよう。皆外

で食べているみたいだから。そろそろ気心も知れてきているようだから自己紹介もさせてみよう。皆良くやっているよ。れんが積みツアーの連中にはいつもそれ程の馬鹿はいない。小笠原野崎両氏にも少し長めの自己紹介をしよう。何らかの形で全員の名をこの建築に記してもらおう。レンガに名前を書くとか。結局これはしなかった。八時過朝食はいつものヌードル屋。中国人経営の店で小笠原さんなじみの店。現地の事は現地の人が一番知っている。毎朝おいしくいただいている。汗まみれで眠って、汗まみれで飯食って、食後今日二度目の水浴。これだけ汗をかければ体によいか悪いのかわからない。三六〇くらいだとナリさん（小笠原）は言うが陽光の中はもう少しあるな。

女性達が三階でおしゃべりをしている。女達の会話は恐ろしく日常的かつ具体的現実的で、これは生物としたら強いと思うよ全く。女性の哲学者がいない事がよくわかる。勿論日本人のことで、レンガ積みツアー参加者のオバさんたちの生態学的観察の結論である。女学生もいつかはこういうオバさんになるから安心なのだ。男はどうなるだろう。レンガ積みをやってもらいながら観察するに特に私の学生は弱いな。あのひ弱さの正体は何なのか、あそこまで弱いと矢張り気になる。もう直そうにも直らないしね。イタリア紀行読む。プノンペンで読むゲーテのイタリアは面白く、理解がしやすい。旅の中で旅を読む悦楽の故であろう。九時レンガ積み開始。

終日レンガ積み。海外青年協力隊の若者数名も加わり総勢五〇名程。壮観である。文字通り人間の手でレンガを積み上げている光景は日本ではもう見る事ができない。部分部分は自由に遊ばせて、つまりデザインされて、ゆるく全体を統括する。吉阪隆正の不連続の連続。私の言う開放系の実践である。

五時終了。皆はJETROで夕食をご馳走になりに出掛ける。私は小笠原、野崎とおかゆ。

五月二七日

朝六時前起床。一人熱を出した女性が出た。予想をはるかに下回る発病率である。今日が実質的には今回の仕事の終りの日。次回からは休みをはさんで丸々十日間仕事に欲しいが、体が続かないだろうな。結局数名体調を崩した。内二名が石山研。弱い。まことに弱い。

ひろしまハウスはようやくにして全体をどのようにしてゆるやかに秩序立ててゆくか、その方法が視えてきた。今回は七〇名程に人数を増やしてやってみよう。三五人と五〇人がこれ程歴然とちがうのかを実感できたのは大きい成果だ。七〇人までは指導できると気がする。

十六時より日本大使館のホールで平岡敬石山のレクチャー。やはり平岡さんは気骨のある人物だ。この人物がいる限り広島市民の小市民振りにはガマンしようと考えた。まあしかし市民グループの正体はかくの如きであるのを知ったのは俺には良かった。夜食はプノンペンホテルで小川郷太郎大使、平岡さん等と。ナリさん（小笠原氏のニックネーム）がきゆうくつそうに、しかし大胆に北京ダックを一人でむしゃむしゃ喰べていたのがおかしかった。可愛らしい人だよ全く。プノンペン コンポントム アンコールワットをメコン河、トンレサップ河で結ぶ観光ルート開発を本格的にやってみよう。先ず何から取組めば良いか。秋のツアーで実際にこのルートを巡ってみるのが一番だな。

五月二八日

大使館が車を廻してくれて、ナリさんと空港へ。プノンペンへ去る。ナリさんは七月には一時帰国するらしいので再会を約す。ネパールのジョニーやらとも会う事になるだろう。プノンペンバシンのフライトで日経新聞連載コラム書く。人力建築と題してひろしまハウス上棟式のことを書いた。昼過、バンコク、シャングリラホテル着。一日ゆっくり休むつもり。FAXを日経に送り眠る。やっぱりね、疲れているんですよ人並みに。ゲートはまだヴェネチアに滞在中である。この巨人の好奇心とエネルギーの大きさはあきれ返ってしまう。一緒に旅なんかしたら殺されちまうだろう。しかしゲートは孤独になる為に旅をしたのだと言うが、それは本当かね。書かねばならぬ事を伏せている部分が大いじゃないか。人間はこんなな、ある意味では大きな文化的感心だけで日常を送ることができない筈がない。それに喰べ物、食事に關する記述が少な過ぎる。文章を読んでいる限り、果物だけ喰べて生きているようだ。酒の話もまだ出てこない。ヴェネチアで酒も料理も出てこないのはおかしい。奇妙である。

五月二九日

ゲートはリドに渡り、海を見た。この巨人はリドに於いて初めて海というモノを見たらしい。北方からの亡命者と己を呼ぶゲートが海というモノを驚きをもって接し、子供のように波とたわむれ、小蟹と陣笠貝の動きに見とれ、その様子を二時間程も見続けたいたのは、それにしても驚きである。全ての創造の素は好奇心なのだという事を改めて思い知る。ゲートのイタリア紀行を読まねばと考えたのはシシリアへの旅であった。フィンランドからシシリアへ北から南へ動いた経験がゲートのワイマールからシシリア

アへの旅を思い起こさせてくれた。バウハウス大学とのワークショップ体験もありワイマールの沈痛で憂鬱な感じも体験していたから、そしてワイマールでゲートハウスを見た事もあったろう。実に暗く冷たい石造の小屋であった。さぞかしゲートは寒かったろう位にしか当時は思わなかった。あのワイマールの暗い小屋で一人モンモンとして暮らしていたゲートが、何故光溢れるシシリアくんだりまで足をのびしたのか、突然パレルモで知りたくなったのである。それで旅の中でイタリア紀行を読んでみようと思いつた。東京の暮らしの中でゲートでもあるまいと思つたのであるが、仲々これは大部な本だ。旅の中の休日にはしか読めない。あるいは飛行機の時間を利用するしかないのである。そんなわけで今は今、ゲートと共に旅をしているのである。こんな巨人に接するにはそれしか方法が無い。しかも年を経て、私の方のイタリア体験も増えている。今が潮時なのである。窓の外はすぐバンコクの大河チャオプラヤでそこを動めく船小船を眺めるのは楽しい筈なのだが、それよりもイタリア紀行なのである。ゲートは今、リドでカニとたわむれている。おかしい。しかし当然の事ながら啄木みたいなカニとたわむれて泣くというセンチメンタリズムは一切ない。あるのは巨大な好奇心だけ。博物学的な好奇心とそれにある程度見合う知識がある。私にはそれが無いが、今更だめだ。若い時にもう少し読書しておけば良かったと今になって思い知るのみである。少年老いや早く学なりがたし、をバンコクでヴェネチアの旅をゲートと共にしながら痛感するのである。

ようやくにしてゲートは二週間チヨツとのヴェネチア滞在を切り上げた。夜中の二時の船でヴェネチアを去った。北緯八十一度から北緯四十五度へと南下を始めた。まだイタリア紀行は岩波文庫の上中下三巻の一冊目の半分程である。ゲートのイタリアはま

さに大旅行だ。テラスに出てバンコクの空気に触れてみよう。

チャオプラヤ河の活気はいつ眺めてみても独特なものがある。

空気が温度騒音あらゆる要素が入混じって都市バンコクの中核母体をつくり上げている。東京の隅田川に欠けているものが全てここには在る。

昼過ぎ汽車でアユタヤヘスケッチの旅。鈍行列車で内装が木の汽車だ。

空が美しい。雲は積乱雲、筋雲様々な種類が入り交じっていて複雑である。気流の変化が激しいのである。アジアモンスーン地帯独特の空だ。この空の様相がこの地域の人々が実に多彩極まる祭事を作り上げたもとであろう。と、この辺りはゲーテ風に書いてみました。しかしゲーテがイタリア紀行を書いたのが三十七才の時だと言うのだから恐れいってしまう。賢者は若い時から賢者の顔をしているものらしい。

イタリア紀行を読んでただただ恐れ入るのはその筆力、エネルギーなのだ。私だつてこのメモをつけているから、質量共にそれがどれ程のものが良く解る。一日に書いている量が凄まじい。書いている事の裏側には数層倍の書けない事があるのだらうから、ゲーテさんの思考量、諸々の感受の実体の総量は実に驚くべきものである。あらゆる分野への好奇心が巨大だ。建築に対してもパラディオの古代回帰性の正統性を見抜いている当りはゾツとする位だ。歴史絵画、音楽、彫刻、演劇への知識関心共に巨大である。司馬遼太郎の晩年の紀行がこれに近いエネルギーを持つと思われるが、年令がちがう。ゲーテは三十七才でこれを書いた。しかも、その人生の必然としてイタリア行を決行したというみずみずしさがある。しかし、である。五十八才の私だつて、みずみずす負けていられないのである。ゲーテは馬車、船、徒歩で旅をし

た。私には飛行機という成層圏を飛ぶ乗物が在る。それにゲーテのスケッチはワイマール近郊で見た事があるのだが、マア下手であった。固苦しいものであった。私のも下手であるが、これは何とかトレーニングすれば追い越せるかも知れない。世田谷村日記をメモし続けているお陰で三十七才のゲーテと張り合うつもりになれるなんて幸せこの上ない。しかしイタリア紀行は長大である。お目当てのシシリー、パレルモに私が辿り着けるのはいつになる事やら。トボトボ追いかけるしかない。

窓の外はチャオプラヤ河のさんざめき。とブーゲンビリアの花そして花。私の心はゲーテと共にイタリアに在る。マ、しかし、ここまで言う必要もないか。

五月三〇日

朝食後リムジンハイヤーで空港へ。三〇分弱千五〇〇バーツ。バンコク アユタヤの汽車が一時間四五分で十五バーツ。金さえ払えば安全で速く清潔に動けるシステムになっている。九時四〇分ラウンジで休む。昼前の飛行機で東京へ。機内でトモコーポリシヨンの友岡さんにバツタリ会う。しかも隣の席でお互い仰天した。タイのパートナーのチェンマイの工場で製品チェックの事。チベットのマンダラを拝見しに来週お会いしましょうという事になった。十九時成田着。家に電話。地下へ電話するも留守電になつている。とんでもない事だ。この時間でノーノーと留守電にするのか、大体私の事ム所が留守電対応なのかとあきれ返る。こんな事教えてないぞ、何回言つてもわからないんだな。プロとガキの、サークルのちがいが。私の地下も今やただの設計サークルなのだ。人材不足人材不足。こんなことは私のキャリアで初めのことだ。